

くらい亡くなったことが、言いようもありません。

二十三年五月三十日、舞鶴上陸、復員。

## 抑留記

長野県 黒川隆佐

大正十二（一九二三）年二月二日、飯島町本郷に生まれる。家族は両親と、兄弟男二人女五人の七人で、農業をやっていた。高等小学校卒業後、農業、ナシを作る。

昭和十九（一九四四）年一月十日、現役兵として高崎の東部三八連隊に入隊、毎日軍事訓練。高崎の観音様へよく駆け足で行く。一月二十九日夜ひそかに軍用列車で高崎を出発、九州博多港より乗船する。雨の降る中、帰還兵と交代に船に乗り込む。朝鮮釜山上陸、列車にて満州より北支へ。

まず廊坊で体力検査、各中隊へ分かれてそれぞれ

中隊の駐屯地へ向かう。三中隊は廊坊で初年兵教育をする。約三カ月で切り上げる。歩兵中隊で豊田中隊長であった。教育が終わると私は豊台へ。そこは北支派遣軍の六三師団司令部があり、司令部付で当番をやる。

河南作戦が始まり師団はがらあきであった。六月、河南作戦は終わりを告げ、八月より九月にかけて部隊は帰って来る。陣第四二八六部隊（独立歩兵二五大隊）は辰県へ集結、私は中隊の本部付になる。

二十年三月ごろより北京地区を警備していた六三師団は満州へ移動。朝鮮を通り九州へ、沖繩へ行く計画であったが変更して通遼に集結。そのころ（六月ごろ）既にソ連参戦の予想があった。北京地区から部隊が引き揚げて手薄になり残留部隊がやられたので、それを追いつ返すために六三師団が出動作戦に満州の国境を越え北支へ入る。六月ごろであった。作戦を終え満州へ帰る。中隊は満州奉天（瀋陽）の糧秣廠に入る。奉天で終戦、武

装解除、ソ連軍の指揮下に入る。黒河よりソ連へ、九月ごろであった。

汽車で二日くらい乗った思いがするが、炭鉱の街、人口約二万くらいというチェレンホーボに到着。収容所に入り三年間の苦労が始まる。仕事は炭坑作業や鉄道の移動作業、建築、水道の穴掘り等いろいろの作業があった。私は医務室勤務であった。発疹チフスで二十一年の一月より二月に六百人の戦友が死んでいった。

二十二年五月、いよいよ日本に帰ることができた。

帰国後は農業でナシを作り生計を立てて生活した。現在、妻と子供と暮らしています。

## 抑留記

岐阜県 丸山 清公

生年月日 大正十四（一九二五）年九月四日

本籍 岐阜県恵那市長島町正家

軍歴

昭和十九（一九四四）年十二月一日

浜松陸軍第七航空教育隊入隊

同年十二月

中支派遣軍に転属、同月中支に出発

昭和二十年三月

一期の終了後、隼九八六七部隊（五七飛行場大隊配属移動、湘潭飛行場に勤務）

同年六月

大隊移動により南満州新立屯飛行場に向かい七月到着勤務するも一カ月で終戦となる

抑留歴